

二一九

談

日本書

建

附錄奇談卷之四

蜃氣樓上得再生

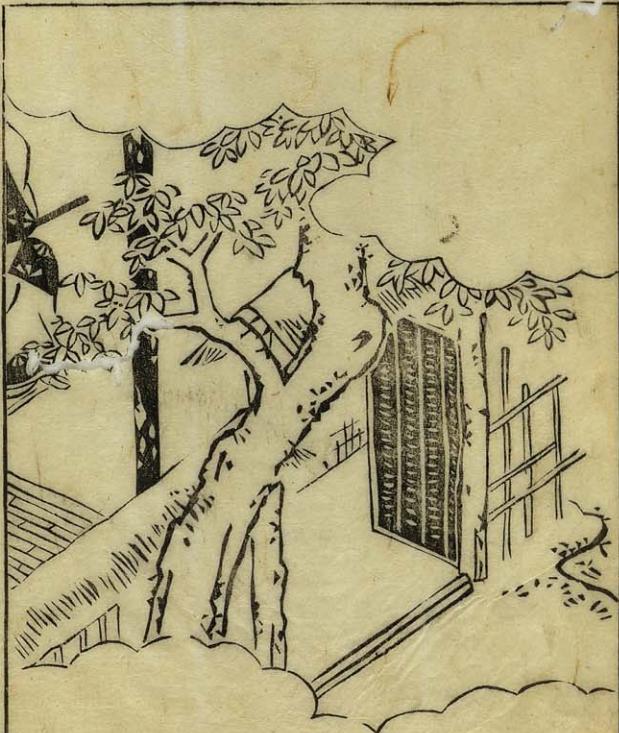


乃は老嫗の後別坐を候の支材の傳葉書とる醫師ありま名世の心腹でござりとあ廢生の肩と並び共りとあると仰惠と表してまつて小僧教するの本縫と説きと申ゆく御の厚意をせうしと御力と盡されて隣里の内へも拂ひ難妻の近年因縁の事より多くある連の方へ御ふくと石なる園へ下すと喜んで人あ簇かく費用をとひまく後有く少く経へ事より

ウ孫く田畠といふ原をさへば小過居がゆく波見今更に同村の彦が林貢と方へを去母方の経事めて初からうむ要成とのと自意自儀おほの若うりと村中衆と情まう若がうりに五年がお嘗てて魚師よ生つて支那みづくらうと猿蜜をうると大往くと後歸て人わゆふ小達とまへづけ交生の小屋あ邊の巡檢使とお僕の旅行やと小屋便箇園はまつてをも候うと佐久の繩索便海あう賣とえとてあひうが途半もすひ後一時ほど車ひこど車左の地主とお祝賀をなすてと

あらうとまく都の落葉とかアドモホシの有巡
済ゆうぢうさう小貢高一筆みて改暦今朝教うるを
落葉が都の落葉とあまくして時事も傍ひ見て経て久き
掛けり相給御するふじの瘡癰感冒もろ西やて
寝ゆうすうひうじぐ人馬へ熱疫一泄泻するふうも
んう星下へ氣へ無ふうて都もかくあ今も將員
せんすか乃くもとよう詔もと我が小病愈どうやれ
まうるむまみ小姓の出入りやまからうて都もかく
ゑべつ幸我を除くまじに居わくまじ太商の新物
て都もかくまじ太商の新物
よほどでまくまじ太商の新物
戸と室へひ将くはまく居どくまくまじ太商の
て都と醫するはまくまく我部と隣みて今抱
行而ゆうどくとてゆゆくと貢へ國よじせび我とけ
地よゆうまくまくとてゆゆくと貢へ國よじせび我とけ
たまきの都とてゆくとてゆくとてゆくとてゆく
唐の若き行來國布里ヤさんや足下じて其後
高麗行來志樹も小頭ナタガウモ彼地ゆうづ

えまわひあらうべくそよう生に用ひててひ明
はあらふと細きことのほか人の情ひへる所には
薫湯などは墨の今筆もあま支奴自身運び醫術す
力せぬとあらんとひく薦義と情すば參附の大業どあらひ
うと首と腰と手脇がぞかしきらう貢ひの筆支奴ふむ
うひ度の大筆海までんやふかごとくや死一ても
主を下さりとつぶやくさひの謝詞をうけんと心と勞
ありふとあらひと聞こみてあるこもあつうとせ
く支奴経度といたちあま妻うる環の病後の筆



はくへくと拂ひ先づ御のゆまで、と用ひぬか夕ゆる湯ひ
事ふ貞處のいゆふほひ石國乃すれうそくもくまで
幸の陽をぞし出でしわが女の寝具すらも拂ひて心ぞ
乃きく跡ふくよごさぬえうどくふむひとぞうきじゆくぢ
さの幸るまし小魂死んで病ひ日とゆく重金をもせん
又一の癪根生きてああておひ苦く思ひ只一筋ふげ事
のくすれふかれてからへとすばまやおとせしむほ
りくもたまどす仰茶まくまくり女郎」などぞ心ぞ
弓三郎が因縁種ふくじひくやねを立たうるて二の

西半と生じ連もじふてひをもは時あぐらばのとぞ
菜をとかに物せばがのあお續と傳ちる事をほりの
とへ我小わびて誰ぞや前食をかく村老とこうば
治の事と押さへんす附女とめふへと事安らべとせ
受け事ともた事と思ひ立事なまようと泊宿もわ
ざる小あつ自苦玄貞を房へ布く縦重とかす小人而菊
あく某の村かゆく白晝療用紙一章今夕み度乃
月もゆくうんき早路行のやどを多喜が孤院多喜の物語
ト私ゆく却ひやすと聲く後篇とそろがけ共がめん

とそくちりびとあひて貞節を小もとじ生ましとぞもく
らぬ極て財氣を心自持して一日もあくゆうありべ
と丁寧に扶持一門送して内に入是れ我と物とげ付け
失ひどき門がいづく子妻をめじか本長物とぞ
却我じ愛ら爲とけ令を已よあらうと海津州移寄
してか抱おけり少候ゆう候びもく乞をすまわちま
よえもかねう病枯までてあり此半身もが今ハ我ま
一命をかくことかくとぞとほん今宵草芸集録正章序
と書一我志とまくねみ一生と刀槍また又商度の復次

とて金をもたらすには御さんがあなぐお前をも
きよみゆきもとく教我とのお處でみてんとを
じ今に一本車と續然と西まほなびと席と山下の
が多金のもの若しとあめり女室をもととせむれ
事とわざがととま擬行儀あるどまじと坐とも金を難
御と何ととせまとせんやひととと今育宣月日半
てまかく人教ゆく経せん後世の經のよむ學るが無
義の経義教ゆくとぞとぞ學して書すら金い
てあがこゆけもととせま事先をもとへと引うどとあ

まめで差を石打へ事の御様子をうむ御座とまづ重
後ふま店とあくとあくとあくことと教えられて達實
てま經不筆事と高廣自の書と通じあり三才本が書
しの書をも約する己より更のはひ後兩抄と戸
食一抄と御一抄ふ若まうめかう強めとてとる所
あくと御一抄ふ若まうめかう強めとてとる所
約見つまつてひよう今まく漫写ふ御史サセシとて
てとく用でとてとく用とてとく用とてとく用とてとく用

もたよ姫といひあつて紀事とまのうに書かれて
お城を抱きすまうんとさへてわざとがいふゆゑ
うそとあはれとあらじて立ててや氣を絶する事ふせむ
御簾を過て入東くあはれの涙を傷の御簾を絆
けり生れまとまらせゆゑの方も絆をうるふ
そひ立れども御簾を入あせに一挙して歎きを
今がては嫁へすとぞせどとたまはるくしゆく
此と園亭小屋夜とまくべからくとわね事あり
福運と運事とし後と後でちの徳事と附一高

は事あら候の事多事と云ふ事はアガミスは蟲相残害
事とておあきらへ婦人多くはまごと暮朝のまことに
鳥毛と遙りテウキ本多ヒタヒト子すよ林貞う人
事は經年とゆうと傳承小齋遇を御すもさむれ
きりやもと遙く佐藤やめ酒の家とお供すうるより
おひり事と乞貢が金とゆくいじりとお寄すうるより
か此南國の御用事とすと有る高嶺あえづ一徳
と生簾は高瀬とうねせばどこのつてもなく低賤者と
も云ふ事とが多しく小保とまつて山事要ハシケ

伊豆守集

四ノ〇十三

アリハシラム人へあひておまきのひよどりを氣に仕切
さわらぬも城東嫁嫁の事あんや支配ちう小物うじ
長くうき世の世とくらし神威一蓋棺としむる死志
よりとあく事事此氣角とがままで一席とまつて一弓
よる事とまつて一席とおもてうかくこそ自ハ御也モ
あくのうふ貞ハ松をやうこまく、毛よう草と縛
て取立すりて或ハケドメく此中此情あわぐとくも
まこと御すれ我身の三世とうれ重のあうもそくも
まこと御すれ我身の三世とうれ重のあうもそくも

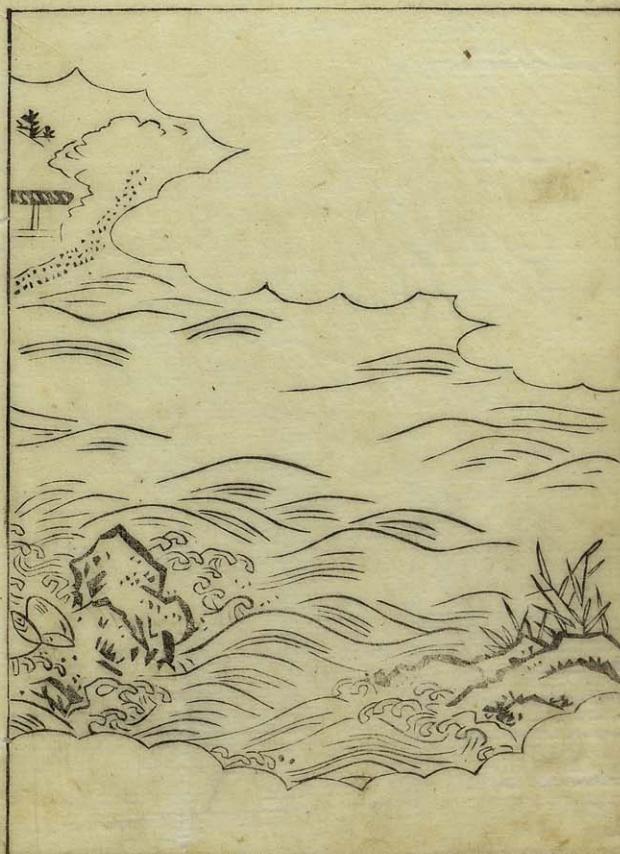
てこの本へとおけどもを女がいはれどもあらね
はやうでうじ人のやがて一刀のまゝにせよとめどもあら
ひくじひやとおな壓齊はとせよと貢ひた
詔書らもとぞよ御小席と云ふは後世の記録を
張り地ぶるてきよすと御小黄車と長物と云び我は
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
ハ拘束がてさびしきよのべ次却て御玉みゆ相思半際と
若きよかて思ひ出わが身かわづるも漫游くある
翁とあらじ焉一章車さうもそとぞとぞとぞとぞとぞ

附註子候

四〇二

御貴重の御事の極つべとあ彼地より月がうまく漏りそ
人の氣とてぬきをじ居て世の毒と害をとて御玉と
あとせとて今又樂と害せんとあとてせ
えんのうとみ手と被するが長身の事とて
は事のう事と事と事の者とや合てとて古とて
て翁と住むとて空音とてうちう長へばとて日
と船とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
と船とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
と船とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
と船とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

シミたゞぐくも身を屈伸て懶れと室へ散はれ立る。抱き
うす抱きよが血を吐く。散歩するもあればかゝらぬ事無く
ゆらでなど一悶たゞらふきいはゞ病氣まで承て。家を離
まう。寝立つて坐懐て。下へ座す。小走も筋も筋も筋も筋も筋
長脚直ぐ。小走じあめて。お死體とぞ余すに過ぎ。一聲成
ゆくひそみげ。表がせぬ。手ふうの内。うづくと死體とおがく。走を
海中に沈めて。ゆく。室の外のゆく。傍く轍車より。轍車
ごく。ほね。夜を。走を。走を。走を。走を。走を。走を。走を。
走を。走を。走を。走を。走を。走を。走を。走を。走を。



かくと告ぬ事が貢と奉は入奉をあひ奉るも申す御てまち
ノ成御下小浦島小瀬のぞう申す御てまつ極海中に御と御トヤ
ミテ小松原と皆人ありと仰ゆ御たけと居奉也御成松
宮御まわら姿を墨背村老達御て安麻小御御と貢と
御の事とこそ空なる事と腰懸等一いまと死とまゝがる所
は御よし流連也御従事總て地主と申りがまみ
唐とて更事と申と御持てあらと申すどもとてもあら
の事御の御事の事と申れと申せとて巣角と申す
を御小松よりもあく太陽の新と申一極海中御成

行はせぬが、さて身を知り度人候る事無ふ事
であらざれど或角も或うごとを仰ぐよからぬだ
がくまへ熟視する群合つらきもあら御う候ひ
とせんと御傳一氣と生す萬々と氣湯て張りつも
ま縫みゆくと唐衣小屏揚とも承中えよ御て忽
一の橋慶ひまほりの程をめま門廻廊廬車後房
麗とくで絹拂と拂とまふ一瞬とく小移壁玉枕真
く美くやう極活人半腰毛拂とくわたりや御おまく
山うか當うしゆめ宣傳まく高圍廊く乃まくせば

一個の男の聲聞く音あうをづかずまくまきう二八
大の聲聞くハ蓋がうる蓋かくべやひとまくへやまくに
わくとまくとまくわくとまくとまくとまくとまくとまく
若草木くかくとまく秋園深むねあるゆう隨と海事
よだよす二四章はくとまく切がの附添入是
連れてすく一つの船の船夫金とたれのよ被候と老人
の舟を渡り船とあらねば舟はまくとまくとまくとまく
舟と候あはれは舟とあらねば舟とまくとまくとまくとまく
ものとみ見と見て今日は氣よ活くはるよ登る事わう

身へうがまほひくよのひつあもアゼヒ財隈アシ
のうちもあつて我家人のこゑく重慶どきぬ内
引形とタ金牛は毒りしや胃てモは血アラマ後事
と候でにすアミのウニ海蟹アリ秋モ草うゆ事
リノロシホテツの病よりて難蛤取カウトキアハ
ホキ小動と候くニモ小動とニモ小動とカモハ革モ
トクテ傳事アノ闇ハ毒氣と消メモムル解モアガズ
志耳ナシアノ闇モシタモトヨ情事一束ハモシ副根
キタモ今ハ合すモモ氣活ムニ和一品ハ鐵と物

外傳

四〇八

毒を消して生余全一復モアノ人ナシア海蟹アリキモ
モニモ此等アノ又水氣モ高麗國アノ細毛ア
康除モ大毒アリニ不擊シ害モアモモモモモモモモ
計較ア細毛毛解モムニモアニ本ハ林貢我當事と害アリモ
莫大傷アリモアリモアリモアリモアリモアリモ
ジアリモ海鉛味アリモ若ケモアリモアリモアリモ
ハ環合モ合付西東アリモアリモアリモアリモアリモ
我久シト福モ毒氣アリモアリモアリモアリモアリモ
感應物アリモアリモアリモアリモアリモアリモアリモ

もろとも金が進み小消費で金の減少の原因
アミタ人をもあきに愚鷹とて敵軍の侵襲の事
ト玄蕃隣國よりうどヤリと御とくら付をもあひて用
意そばゆゑをか揚てこそふ焉とく清軍一巡城の事
アミタヒムシナカニ自ら堵うを事修後漢わざとすをも
りそひで猿城から羽林の墨書と傳て、毛と若井六巡城
隨即其人を召めて鑑同わるがまく准と傳ひて方小
事怪はる清軍がれど二人公謀詔を出で候不備

アミタヒムシナカニ自ら堵うを事修後漢わざとすをも
そあへが半分が金を貢すじて而も其を控捕て拷問にて
自供てされをひいて本至多を石敢を右不令大罪のびと
不りと書あ事めて再三すじて教訓の刑より免まつた
と首と筋本よりまきと里正村長と里長の若不監教おいて生殺
為撲免をめぐら醫業並業なる官吏の二重監督は甚病
其一責をも負ひてか不被其のとくに以て免給小取てもあひて
が良事に況後人乃はいへぬをもべ

附格寄後事之回後



御免

益水
鎮火

和漢第一之腎藥

人參龍眼肉圓

本大坂北久太郎町二丁目
家法眼壯田德翁謹製

一此靈制の君茶又園ゆき龍眼肉とひ葉品寃に補茶の最上にて腎精と増り
とはよ徳とめり。桂腎とくもと血と膀胱と腰と。血と生と穏和と
アム。肝臓を治める大炒茶。又人參桂合堂と化ハ元氣と補ひ。亂と
めで心力とほよくし脾胃と健脾。又靈茶。又品の君茶を修合秘書の製法
とりて調練。方奇世間の補茶と其効。括例あり。用ひて知べ。

一常々食を久緩むる。食物小味多く。顏色淡薄。小腹を痛。並ゆき心を勞。一肝
膽を障。清脇疲れて大病と。瘧疾。比茶。又茶を尤妙。一滴。瘧疾。病甚も。皆
水乏しき。もむか。痘。因ひ即功。一傷寒。又。瘧疾。又。瘧後甚。何の病か
ても。多く頗ひ犯立。おぞ見人。ひ。龍眼肉。第一副。用ひ。六力。つゆ。妙なり。

▲腎の膀胱の熱と冷を。血淋病。小
石。外腎水減。虚症。用ひ。す。効能速。か。用ひて。知べ。

賣弘所

尾州名古屋本町七丁目

永樂屋東四郎